

## 繁辭傳「象・辭」考

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 上原 好一   |
| 雑誌名 | 漢文學會々報  |
| 巻   | 6   |
| ページ | 91-112  |
| 発行年 | 1937-11-05  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15068/00146823">http://doi.org/10.15068/00146823</a> |

# 繫辭傳「象・辭」考

上原好一

- (一) 象言卦象
- (二) 辭言爻辭
- (三) 變者或卦或爻
- (1) 卦變
- (2) 爻變
- (四) 剛柔言卦變
- (五) 言動限爻辭
- (六) 吉凶言爻辭 占言爻辭
- (七) 餘論
- (1) 卦辭爻象
- (2) 變
- (3) 吉凶

現行の易經を形成してゐるものは、昔、聖人が物の宜しきに象つて作つたと言ふ象と其の象の吉凶を説明してゐる辭。

との二つ、及び此の二つに對して解釋を加へた傳文である。随つて象と辭とは易經最大の要素であり、之を繫辭傳の中から拔出して論じて行くのは大變意義のある事であらうと思ふ。

そこで繫辭傳中に用ひられてゐる象と言ふ語は「卦象」を指すのであり、辭又は繫辭と言ふ語は「爻辭」を指すのだと言ふことを明かにしたい。(一)象言卦象 (二)辭言爻辭に於て此の事を明かにし、(三)變者或卦或爻から (六)吉凶言爻辭占言爻辭までに於て、此と關係のある諸項に論及し、最後に残された問題を、(七)餘論として三節に分つて扱つて行きたい。

此の立論の根據は第一は思想の上からであり、第二は文章の構成の上からである。換言すれば内容と形式との上からである。第一の點は開卷第一に「天尊地卑、乾坤定矣。」とか「卑高以陳、貴賤位矣。」とかと天と地、乾と坤、卑と高、貴と賤といふ風に繫辭傳中に脈々として流れてゐるのは此の二元思想である。随つて此の傳中に用ひられてゐる「象・辭」も相對した二つのものとして用ひられてゐると見ようといふのである。此の事は呂祖謙も古周易の中に「說卦凡以卦與爻二文相對」と述べてゐる。此の說卦は後程分ることであるが繫辭傳を指してゐるものである。大田錦城も「象辭相對繫辭恒例」と述べてゐる。第二の點に就て述べるのが此の小文の主な仕事である。此に就ては各項目を逐つて述べて行きたい。

其の方法としては歸納と演繹との方法に據るのが最も確實だと思ふから出来るだけそれに據りたい。此の論は大田錦城の「繫辭詳說」が本になつてゐる爲、此處に黙つて引用する錦城の語は同書にあるものであり、又彼の說に觸れる事の多いのも止むを得ない事であらう。又此處に用ひる傳文の章段は、色々問題もあらうけれども、便宜上朱子の「周易本義」の區分に從ひたい。

## (一) 象言卦象

聖人有以見天下之赜、而擬諸其形容、象其物宜。是故謂之象。(上篇第八章第十二章)

朱子曰、象卦之象、如說卦所列者。

錦城曰、象卦象。健順動巽、象其物宜也。

象物宜者、坤爲牝馬、離爲牝牛之類。

此の象が卦象であることは改めて説明を要しないであらう。孔穎達も「六十四卦、皆擬諸形容、象其物宜也。」と言ひ、象を更に「謂六十四卦、是也。」と言つてゐる。次は之を證據だてる一つの有力な例である。

八卦成列、象在其中矣。（下篇第一章）

朱子曰、象謂卦之形體也。

錦城曰、象卦象。

## （二）辭言爻辭

聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉以斷其吉凶。是故謂之爻。（上篇第八章第十二章）

孔穎達曰、既觀其會通、而行其典禮、以定爻之通變、而有三百八十四爻。於此爻下、繫屬文辭。

爻と辭と上下照應してゐるのであつて見れば、此の辭が爻辭を指すことは極めて明瞭であらう。

象と辭と相對して述べられてゐる以上、象又は辭のみを切離して述べることは非常に困難である。二つ併行させて論じたい。此に就ては錦城は左の如く度々之を述べてゐる。

凡繫辭中、言繫辭、言辭、皆指爻辭、無卦辭者。

是卦象之象、爻辭之變、對爲言者也。至若卦象辭相對、象象爻相對、象辭變相對、則亦如紛然而無統然。雖然要之、象言卦辭、象言卦象。是一類也。辭言爻辭、變言爻變。是一類也。其判然而爲兩、象爻相對者、固不可得而亂焉。」

辭者爻辭也。象者卦象也。是此篇之確例也。

「此篇」は勿論繫辭傳上下篇を指すものである。

按易中、卦有象、爻亦有象。卦有辭、爻亦有辭。雖然此傳中、言象屬卦、言辭屬爻。卦之象、爻之辭、判然相對、不可混淆。

「此傳」亦繫辭傳を指すものである。

かういふ前提の下に用例を舉げて説明し、疑はしい所を解決して行きたい。

極天下之蹟者存乎卦、鼓天下之動者存乎辭。（上篇第十二章）

韓康伯曰、辭爻辭也。

朱子曰、卦卽象也。辭卽爻也。

錦城曰、卦卽卦之象。辭卽爻之辭。

此は韓康伯、朱子共に一致してゐるのであるけれども、孔穎達のみは「動有得失、存爻卦之辭。」と述べてゐる。併し乍ら先に引用した上篇第八章、第十二章の文中、蹟が象に屬し、動が爻に屬したのによつて明かであり、又上に卦と用ひてあるから、下に應ずるものが爻であるべきは文章構成の上から當然考へてよい事だと思ふ。

言天下之至蹟而不可惡也。（上篇第八章）——卦

言天下之至動而不可亂也。（〃）——爻

此がそれ／＼下の卦、爻に屬することは前述の所で明かであらう。

聖人設卦觀象、繫辭焉而明吉凶。（上篇第二章）

此に就ては仲々解釋が一致しない。孔穎達は「法其物象、然後設之卦象。」と言ひ、又「繫屬吉凶之文辭於卦爻之下。」と言つてゐる。朱子亦「此言聖人作易觀卦爻之象、而繫以辭也。」と述べてゐる。王宗傳は此の辭を「卦之辭」だと言つてゐる。前二者よりは王宗傳説を未だ是としたい。併し乍ら卦と象、繫辭と吉凶の二つになり、上を卦、下を爻と見る

べきものではないかと思ふ。

象者言乎象者也。爻者言乎變者也。（上篇第三章）

韓康伯曰、象總主一卦之義也。

朱子曰、象謂卦辭文王所作者。爻謂爻辭周公所作者。象指全體而言、變指一節而言。

東涯曰、象者系卦之辭、如乾曰元亨利貞、是也。爻者系爻之辭、如乾初九曰潛龍勿用、是也。（周易經翼通解）

錦城曰、象卦辭。象八卦之象。爻爻辭。變六爻之變。

八卦成列、象在其中矣。因而重之、爻在其中矣。剛柔相推、變在其中矣。繫辭焉而命之、動在其中矣。（下篇第一章）

韓康伯曰、繫辭焉而斷其吉凶、況之六爻動以適時者也。適時之功則存之爻辭。

孔穎達曰、適時之功則存乎爻辭者、卦者時也。六爻在一卦之中、各以適當時之所宜、以立功也。欲知適當時之功用、

觀乎爻辭也。

錦城曰、剛柔卦、變否泰剝復之變、辭爻辭、動潛見飛躍之動。

此の中、否泰剝復之變とは卦の序列に泰を受けるに否を以てし、剝を受けるに復を以てする卦の變化を指すものである。潛見飛躍之動とは乾の卦の中、初九潛龍勿用、九二見龍在田、九四或躍在淵、九五飛龍在天を以て爻の變化を示したものである。此等を順序を一つ宛替へて、否泰剝復、潛見飛躍と言ふのである。此章も象と剛柔（變）を卦に屬せしめ、爻と繫辭（動）を一つにしたら意味が明瞭である。王宗傳も此の繫辭を爻辭として扱つてゐる。此の意味に於て朱子が、「剛柔至動在其中矣。剛柔相推而卦爻之變往來交錯、無不可見。聖人因其如此、而皆繫之辭、以命其吉凶、則占者所值當動之爻象亦不出乎此矣。」と言つてゐるのは賛成出来ない。

齊小大者存乎卦、辯吉凶者存乎辭。（上篇第三章）

韓康伯は「辭爻辭也。」と注してゐるが、孔穎達は此に對し、「謂辯明卦之與爻之吉凶、存乎卦、爻下之言辭、是也。」と

言ひ随つて「云辭爻辭也者、其實卦之與爻、皆有其辭。知是爻辭者、但卦辭變化少、爻辭變化多。此經辯吉凶者存乎辭、與齊小大者存乎卦、二文相對。上既云卦、故此辭爲爻辭也。」と辯解してゐるのは面白いと思ふ。

以制器者尙其象。(上篇第十章)

姚配中曰、荀爽曰「結繩爲網罟、蓋取諸離。此類是也。」象卦象。(周易姚氏學)

以上によつて、卦象、爻辭は大體明瞭になし得たと思ふ。

### (三) 變者或卦或爻

錦城は「傳文言變者或卦或爻、無一定之例。」と言つてゐる。實例によつて明かにしたい。

#### (1) 卦 變

剛柔相推、變在其中矣。(下篇第一章)

錦城曰、按變以卦言。否泰剝復之變、是也。

剛柔相推而生變化。(上篇第二章)

錦城曰、所謂變化者、如否泰剝復、是也。

剛柔相推が卦變を指すことは既に述べた通りである。於是、變に卦變のあることを知る。

是故變化云爲、吉事有祥、象事知器、占事知來。(下篇第十二章)

朱子曰、變化云爲、故象事可以知器。吉事有象、故占事可以知來。

錦城曰、象事卦象。占事爻辭吉凶。

變化と象事とが關係があり、象事が卦に屬するならば此の變化も卦變である。

易有聖人之道四焉。以言者尙其辭、以動者尙其變、以制器者尙其象、以卜筮者尙其占。(上篇第十章)

辭と象とは相應じてゐる。占は後述するが爻に屬する。然らば此の占に應ずる變は卦變であるべきである。

(2) 爻 變

象者言乎象者也。爻者言乎變者也。

錦城曰、言乎變之變、爻之變也。

此によつて變に爻變のあることを知る。錦城は又「辭言爻辭、變言爻變。是一類也。」と言つてゐることは前述の通りである。

六爻之義、易以貢。(上篇第十一章)

韓康伯曰、六爻變易、以告吉凶。

孔穎達曰、六爻有吉凶之義、變易以告人也。

爻變の例として舉げて差支へなからうと思ふ。

(四) 剛柔言卦變

剛柔相推、變在其中矣。(下篇第一章)

韓康伯曰、剛柔相推、況八卦相盪。或否或泰。……立卦之義、則見於象象。

孔穎達曰、云立卦之義則見於象象者、象象謂卦下之辭、說其卦之義也。

剛柔相推而生變化。(上篇第二章)

孔穎達曰、明其推引而生雜卦之義也。

既に述べた所で明かなやうに、此の剛柔相推は卦變を表すものである。よつて錦城も「言乎變之變、爻之變也。相推之變、卦之變也。」と言つてゐる。

剛柔者立本者也。變通者趣時者也。(下篇第一章)

韓康伯曰、立本況卦、趣時況爻。



孔穎達曰、剛柔者立本者也、立其卦本而不易也。則上八卦成列象在其中矣。是也。卦既與爻爲本、又是總主其時。故略例云、卦者時也。變通者趣時者也。則上因而重之、爻在其中矣、是也。……故略例云、爻者趣時者也。

變通は變化と同じである。その事は後述する。然らば變通は爻變、剛柔は卦變である。故に錦城も「剛柔主卦而言、變通主爻而言。」と明瞭に述べてゐる。

(五) 言動限爻辭

繫辭焉而命之、動在其中矣。(下篇第一章)

聖人有以見天下之動、……是故謂之爻。(上篇第八章)

鼓天下之動者存乎辭。(上篇第十二章)

爻也者、效天下之動者也。(下篇第三章)

六爻之動、三極之道也。(上篇第二章)

錦城曰、六爻之動、爻之變動、潛見飛躍之變動。

以上は爻と動とが結びついて離れないものである。随つて此の動が爻を指すことは明瞭である。此から推して次の文も首肯し得られる。

以動者尙其變。(上篇第十章)

姚配中曰、變爻也。動則觀其變。

以上に對し錦城は次の如く重ねて結論してゐる。

言動者限爻辭。

凡言動者、皆係爻之變動。

動以爻言、潛見飛躍之動、是也。

(六) 吉凶言爻辭 占言爻辭

繫辭焉而明吉凶。(上篇第二章)

繫辭焉以斷其吉凶。(上篇第八章)

辯吉凶者存乎辭。(上篇第三章)

韓康伯曰、吉凶之狀見乎爻。

以上は吉凶と辭即ち爻とが一體をなすものである。

吉凶悔吝者、生乎動者也。(下篇第一章)

虞翻曰、動謂爻也。

胡雲峰曰、動專指所值之變爻而言。

動が爻であるならば吉凶も亦爻に屬する事明かである。孔穎達は「上既云動在繫辭之中、動則有吉凶悔吝、所以悔吝生在乎所動之中也。」と言ひ朱子亦「吉凶悔吝皆辭之所命也。然必因卦爻之動而後見。」と述べてゐる。二者卦か爻かの考へは異なるにしても、その辭に係つてゐると述べてゐる事は一致してゐる。然らば辭を爻辭とすれば此の吉凶も亦爻に屬する。

六爻之義、易以貢。(上篇第十一章)

此の貢を韓注に従つて「告」の意味にとるならば、前述の通り「告吉凶」の意味になることは明かである。

吉凶悔吝が爻に屬するならば、それと相表裏する占も亦爻に屬することは論を俟たない。錦城も「占者吉凶悔吝之辭也。此篇云辯吉凶者存乎辭、又云繫辭焉以斷其吉凶、皆爻辭也。然則占者屬爻辭也。」と言つてゐる。

以下筆者尙其占。(上篇第十章)

錦城曰、占爻之吉凶悔吝。

占事知來。(下篇第十二章)

二つ共(三)の(1)卦變の所で述べておいた。尙二三占に就て出て來るが他との關聯上後述したい。

### (七) 餘 論

前章迄に列舉した實例は、大體典型的なものであつた。典型的ならずとも、比較的容易に解し得られるものばかりであつた。併し乍ら何れの經書に於ても、さう全書の用例が整然と統一されてゐると思はれない。殊に易經の如きは、かなり錯簡もあるやうだし、又一人の手によつて仕上げられたものだとは思はれない。それに加ふるに易經は韻を押んでゐる。顧炎武の易音は専ら押韻の書として扱つてゐる。東涯は「周易經翼通解」に於て下篇第五章天地絪縕、萬物化醇の化醇を「化醇猶言敦化、不言醇化而言化醇、便韻耳。」と言ひ、錦城は「周易參考」に於て未濟上九象の不知節也を「其不言時而言節者、押韻耳。」と述べてゐるが如きである。又爻は大體卦の中に含まるものである。隨つて兩者の間に截然たる區別を立て得ないものもある。以上の點から錦城が「繫辭詳說」に於て例外として取扱つたもの、又は私自身疑問を持つ文章を次に取扱つて見たい。

#### (1) 卦辭・爻象

(一)(二)に於て、象と言へば卦象であり、辭と言へば爻辭を指すと言ふことを述べておいた。若し之を事實として認めるならば、次に起るものは卦辭・爻象は如何に取扱ふべきかの問題である。象に卦象・爻象の二つがあり、辭も亦卦辭・爻辭がある。既に前に引用したやうに錦城も此の事を述べてゐる。彼は然し此の四つのものが存在することを認めただけであつて、此に對する解決を與へてゐない。唯一箇所「卦象一也、爻辭一也」と言つてゐる處は或は解決に對する示唆を與へるものではないかと思はれるが、此とて卦は卦の中で、爻は爻の中での問題に過ぎない。毫も象の中、辭の中の問題に觸れない。然らば繫辭傳中には卦辭・爻象は皆無かと言ふにさうではないやうである。極めて稀ではある

が、例へば上篇第十二章「設卦以盡情偽」の卦の如きは後述の如く卦辭であらうし、又下篇第一章「因而重之、爻在其  
中矣。」の爻の如きはどうしても爻象と解すべきものであらうと思ふ。その事は後節それぞれの項下に於て述べるが、錦  
城が例外として扱つたものにも別の意味が発見されはしないかと思ふ。

一體此の「象卦象・辭爻辭」と言ふ考へは錦城以前に於ては餘り見られない。その中から主な意見を擧げてみると、  
繫辭を以て爻辭となすに、其の論據を異にして宋代に次の二人が見出せる。

第一に鄭樵である。彼は六經輿論卷一に於て「繫者有所繫之謂也。言其爲辭各聯屬於卦爻之下也。」と言つて「易大傳  
言繫辭者五、皆指爻辭曰繫辭、如上繫曰繫辭焉而明吉凶、繫辭以斷其吉凶有二。曰繫辭焉而命之。孔子專指爻辭以爲繫  
辭、而今孔子贊易之文、爲上下繫辭也明矣。」と爻辭そのものを繫辭となし、又「要之、周公未作爻辭之前、以卦辭爲繫  
辭。夫子未作十翼之前、以爻辭爲繫辭。費直鄭玄王弼未傳易之前、皆以象象文言爲繫辭。故夫子之所謂繫辭者、指周公  
之爻辭而言、後人所謂繫辭者、指夫子十翼而言也。」と言つて、現行の「繫辭傳」の經に相當する「繫辭」が爻辭だと斷  
じてゐるのである。

第二に呂祖謙である。彼は古周易卷十一に於て、吳仁傑の説を引き、「案史稱孔子晚而好易讀之、韋編三絶而爲之傳。  
顏師固曰、傳謂象象繫辭之屬。則知伏羲文王周公之作、固曰象象繫辭、而十翼所謂象象繫辭乃其傳也。」と言つて、「爲  
之傳」の傳から説き起し、鄭樵と同様の結果を求めんとしてゐるのである。而して引續いて「古經蓋曰象傳象傳繫辭傳也。  
今易指孔子象辭爲大象、而以釋爻之文爲小象者、案易固有大小之象焉。」と言ひ、又「然則今大象當曰象傳、小象乃孔子  
所以釋爻辭者、當曰繫辭傳也。夫孔子釋爻辭之文、謂之繫辭傳、則周公繫辭曰繫辭可矣。歐陽公曰、繫者有所繫之謂也。  
故曰、繫辭焉以斷其吉凶、是故謂之爻。言其爲辭各聯屬其一爻者也。是即孔子專指爻辭爲繫辭。」と論じてゐる。是によ  
つて小象が繫辭傳だといふ事が明かになつたが、然らば今の繫辭傳の行衛はどうなるか。呂氏は更に續いて言ふ。「隋經  
籍志序謂、秦焚書、易以下筮獨存、唯失說卦三篇、後河內女子得之。按今說卦乃止一篇。故先儒疑易文亦有亡者不得爲

全書。」と篇數から出發して「雖然謂爻辭爲繫辭、謂小象爲繫辭傳、則今所謂上下繫者復何名哉。或曰二繫當謂之說卦。今說卦通爲三篇。諸儒既以繫辭傳爲小象、而上下繫之名無所歸、故取說卦前兩篇名之、其實本說卦也。」と今の繫辭傳を以て說卦だとするのである。その理由としては「歐陽公謂、今繫辭之文、雜論易之諸卦。其辭非有所繫、不得謂之繫辭。葉少蘊左丞亦曰、太史公引天下同歸而殊塗、一致而百慮爲易大傳、則漢諸儒固未嘗以今兩篇爲繫辭、斯其爲說卦也審矣。」と述べてゐる。かくて今の繫辭傳たる所謂說卦の中に用ひてある「繫辭」なる語に就ては、次の如く詳論してゐる。

「按說卦言繫辭者六。其二曰繫辭焉以斷其吉凶、是故謂之爻。此不待言而明者。其一曰立象以盡意、設卦以盡情僞、繫辭焉以盡其言。此歷舉三聖之作。象謂伏羲六十四卦之象卦。繫謂文王周公彖辭繫辭也。其一曰因而重之爻在其中、繫辭焉而命之動在其中。鄭深甫侍郎云、繫辭焉而命之、所以明爻也。(其一曰易有四象所以示也。繫辭焉所以告也。正義曰、四象謂七八九六。案七八卽爻之不變者。九六卽爻之變者。然則此章所指亦爻辭也。)其一曰聖人設卦觀象、繫辭焉而明吉凶。言設卦所以觀象、繫辭所以明吉凶云爾。卦謂彖辭。繫爻辭。故曰、彖者言乎象、爻者言乎變。又曰齊小大者存乎卦、辯吉凶者存乎辭。此皆互見其義。」と。かくて「韓康伯蘇文忠皆曰、辭爻辭也。楊元素侍讀亦謂、聖人設卦觀象、繫辭焉而明吉凶。又曰繫辭焉所以告也。蓋指周公之所爲爻辭。以說卦本旨及韓蘇鄭楊之言參之、謂繫辭非專指爻辭不可耶。」と證し、又「或以象對爻、或以卦對辭、曰卦曰象云者皆指夫卦辭也。曰爻曰辭云者皆指夫爻辭也。簡言之則曰卦曰象曰爻曰辭、詳言之則卦曰象辭、爻曰繫辭、截然有不可紊者。不然卦辭旣曰象矣。安得復以繫辭名之。說卦凡以卦與爻二文相對。」と説明してゐる。

右の二人は其の論點は無關係であるけれども、繫辭傳中の繫辭を爻辭となすことに於ては同じである。

次に全篇に涉つて象・辭を述べた主な者として、次の反對例を擧げ得る。

第一は宋の王宗傳である。彼は「童溪王先生易傳」に於て繫辭に就て次の如く言ふ。

繫辭有三。繫於卦下者卦之辭也。如乾曰元亨利貞、坤曰元亨利牝馬貞之類、是也。故經曰、聖人設卦觀象、繫辭焉以

盡其言。此指卦之辭而曰繫辭也。繫於爻下者爻之辭也。如乾初九曰潛龍勿用、坤初六曰履霜堅冰至之類、是也。故經曰、繫辭以斷其吉凶、是故謂之爻。又曰繫辭焉而命之、動在其中矣。此指爻之辭而曰繫辭也。繫於易後者亦謂之繫辭。此上下二經是也。亦如卦辭經謂之家辭。經曰家者言乎其象也。又曰觀其家辭則思過半矣。而夫子釋象之辭、亦謂之家曰、不以爲異也。」

第二は宋の朱震である。彼は「漢上易叢說」に於て次の如く言ふ。先づ「象」に就ては「是故謂之象。有卦之象焉。有爻之象焉。象也者言乎其象者也。言卦之象。爻象動乎内。言爻之象也。方設卦變爻之時。其象已具乎卦爻之中。」と述べ、繫辭に就ては次のやうに言つてゐる。

文王作卦辭、周公作爻辭、通謂之繫辭。仲尼贊二聖人繫辭之意、成上下篇、名曰繫辭。猶序文王之象、而名其篇曰象也。凡繫辭所稱繫辭焉者、或指卦辭、或指爻辭而言。如聖人設卦觀象繫辭焉而明吉凶、指卦辭爲繫辭也。如聖人有以見天下之動而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉以斷其吉凶、是故謂之爻。指爻辭爲繫辭也。二人の意見に就てはそれ／＼の條下に於て述べ得るから、此處では省略する。

朱子や韓康伯は前に引用した文に見る如く、その注に僅かに部分的に見られるだけで、錦城の述べたやうな全篇に涉つた考へはないやうである。之を「日知錄」や「東塾讀書記」に見ても

象即文王所繫之辭。

象者卦之上下兩象、及兩象之六爻。周公所繫之辭也。文王作象辭、周公作爻辭。(以上日知錄卷二)

先代大儒鄭衆賈逵等或以爲、卦下之家辭文王所作、爻下之象辭周公所作。(東塾讀書記)

と言ふだけで、全然此の事に觸れてゐない。錦城は朱子が此の事を知らなかつたと言つて次の如く非難してゐる。朱子不知之、故其所說皆係紕繆。

朱子不知之、故其所說混淆言之、非熟讀此篇者。

## 朱子之言非矣。

併し乍ら朱子は下篇第十二章「八卦以象告」の注に於て「象謂卦畫」と述べてゐるが、此は恐らく卦象を卦辭から區別せんが爲の意圖であらう。朱子の卦畫とする解は其の文が「爻象以情言」と言ふのに續いてゐる事から見て誠に妥當であらうと思ふ。後述する上篇第十二章の象・卦・辭三者對立するものなどは明かに卦畫を卦辭から引離して考へねばならぬ所である。朱子はかなり所の迄考へ及んでゐたものである。而して錦城の此の説も朱子の此の邊から出たものであらう。錦城が「繫辭詳説」に引用した文は全部で六百箇所、その中、後世の易關係の注釋書類からのものが二百七十二箇所であるが、更に此の中朱子のもので九十五箇所に及んでゐる。而して二百七十二箇所の中、批評の加へられたもの八十一箇所、その中朱子に對するもの五十五箇所の多きに及んでゐる。錦城の朱子に對する關心の程も窺はれて面白い。朱子を除いては、徐幾十、孔穎達九、胡雲峰八等が多く引用されてゐる方である。又彼は九經談に於て程朱を程朱二先生、立志之遠、識見之高、高踞於漢唐明清諸儒之顛。先無古人、後無來者。孔孟以後實有二先生耳。晦庵則加焉以博識多通、其經解多取北宋諸家善說、折衷之以其家學、近似集而大成者矣。故其傳之遠、至今不廢。雖有攻之者、愈攻則愈熾、不能撲滅者、其中實有近聖意遠出乎諸儒之上故也。講聖經、明道義者、豈可不由之乎。

と言つてゐるのに由つても明かであらうと思ふ。然し錦城自身も未だ不徹底であつて、二十五歳の時の作かと思はれる二卷本と五十九歳(六十一歳歿)の時完成したと思はれる十卷本の間にもかなり相違がある。竊かに二卷本を書改めたものもあるし、又別に書添へたものもある。例へば辭に就ては次の如く相違してゐる。

辭者、乾元亨利貞、坤元亨利牝馬貞等是也。(二卷本)

辭者、潛龍勿用、履霜堅氷至等是也。(十卷本)

按辭者、元亨利貞之類、變者潛見飛躍之類、象者離益渙隨之類、占者吉凶悔吝之類。(二卷本)

按辭者、潛見飛躍、變者否泰剝復、象者離益渙隨、占者吉凶悔吝。(十卷本)

右は書改めた例である。

剛柔相易、就各爻而言。古所謂某之某、後世所謂變爻、是也。（二卷本、十卷本）

上下无常、剛柔相易二句、以卦變解之。亦通。（十卷本）

此は書加へた例である。此の部分はずつと章末迄混同してゐる爲明瞭を書くものがある。又序で乍ら後述する上篇第二章「君子所居而安者、易之序也。」に對して二卷本、十卷本共に「新安朱氏曰、序是次序、謂卦爻之初終。如潛見飛躍而循其序則安、亦通。」と一度承認してゐるが、十卷本では「程朱諸公無知之者。繫辭之所以不明也。」と書加へてゐる。以上の如く錦城自身徹底を缺くものもあり、又前述の如く文章そのものに一概に何れとも決し難いものがある。其等のものを出来るだけ次に扱つて行きたい。

知者觀其象辭則思過半矣。（下篇第九章）

馬融曰、象辭卦辭也。

孔穎達曰、象辭謂文王卦下之辭。

錦城は、「辭皆指爻辭、無卦辭者。下繫有觀象辭一語耳。」と言つてやはり卦辭を指してゐる。此處に象辭としたのは特に爻辭と區別する爲のもので、辭が爻辭である事の一の反證になり得るであらう。古本は象辭に作るといふのも同じことである。但し上篇第二章に「所樂而玩者、爻之辭也」としてゐるが此の「爻之辭」は對句の關係で、他の辭が爻の辭でないといふ反證にはなり得ない。尙象に就き諸家の説をもう少し聞いて見たい。

象者材也。（下篇第三章）

主弼曰、凡象者統論一卦之體、明其所由之主者也。（周易略例）

孔穎達曰、謂卦下象辭者、論此卦之材德也。

朱子曰、象謂一卦之材。



東涯曰、彖卦辭也。材者言一卦之材用。

然らば次の爻象はどうなるべきか。

爻・象・以・情・言。(下篇第十二章)

朱子曰、爻象謂卦爻辭。

東涯曰、爻象者卦爻之辭、各有其情。

此文は爻と象との二つ、即ち卦爻辭と見るべきであらう。随つて其の上の「八卦以象告」の象は卦畫と考へられるのである。情から推して行けば次の例は之を證明するものである。

吉・凶・以・情・遷。(下篇第十二章)

右は吉凶から推して爻に屬する。又王弼は周易略例に於て「夫爻者何也、言乎變者也。變者何也、情・偽・之所爲也。」と言つて情・偽を爻に屬せしめてゐる。錦城は同章「情・偽・相・感」に對して「情・偽・相・感、如中孚九二、鳴鶴在陰、以情感乎五也。屯六四、求婚媾往、以情感乎初也。蒙九三、見金夫、不有躬、以偽感乎四也。凡此皆以情遷者也。」と説明してゐる。然らば情と情・偽とは同じだとして取扱つてよからうか。

設・卦・以・盡・情・偽。(上篇第十二章)

右は卦に屬する。

よつて錦城は「按愛惡遠近情・偽、皆以卦爻言。」としてゐる。然らば情から逆に推して行つても、爻象は卦爻辭を指すものとして少しも不都合はないものである。次に述べる「聖人之情見乎辭」の如きも卦爻辭と取る外ない。

爻也者效此者也。象也者像此者也。爻・象・動・乎・内、吉凶見乎外、功業見乎變、聖人之情見乎辭。(下篇第一章)

朱子は此の文に對して、「變即動乎内之變、辭即見乎外之辭。」と注してゐる。錦城は「言動限爻辭、然下繫第一章有爻象動乎内之語。」と述べて例外として取扱つてゐる。此の爻象は上の爻と象とを受けて、その儘直ちに下に持つて來た

ものであるから別々のものである。随つて卦と爻とを指すものであるから勢、それを受ける下の吉凶、變、辭すべて卦爻の二つに係るものと見るべきであらう。その意味に於て錦城の「吉凶爻辭」「變卦變」「辭爻辭」と言ふ一般的な注は誤と見なければならぬと思ふ。

是故君子所居而安者、易之序也。所樂而玩者、爻之辭也。（上篇第二章）

陸德明曰、易之序也、陸云、序象也。京云、次也。虞本作象。（經典釋文）

項安世曰、序卽爻位也。居此爻之位、則玩此爻之辭、以處之、然後能隨所過而安樂之也。虞翻本、序字作象、以與

下文合、似不必爾。（周易玩辭）

姚配中曰、序當作象。謂卦象也。

錦城曰、王弼本、易之象作易之序。繫辭中、無一語之及易序。極是謬語。虞翻本作象、極得是正。程朱諸公、無知之者。繫辭之所以不明也。

序を象となすことに賛否兩論がある。錦城も初、序となす朱注を引いて「亦通」としてゐる事は前述の通りである。遮莫此の「易之序」が下の「爻之辭」に相對した文であることを思ふが故に、「易之象」となす虞翻本に賛成したい。

子曰、聖人立象以盡意、設卦以盡情僞、繫辭焉以盡其言。（上篇第十二章）

錦城は此章に對して「按此章亦象卦辭三者對言。」と言ひ、「繫辭中、舉卦象辭三者、唯此二章耳。」と注してゐる。二章の殘りの一章は上篇第二章「聖人設卦觀象、繫辭焉而明吉凶。」である。二章共に卦畫と卦辭とを區別したものであらう。呂祖謙が「設卦觀象」に對し「卦謂象辭」と述べてゐる事は先に引用した文によつて明かである。

要之、卦にも象、辭があり、爻にも象、辭があるのであるが、卦の主たる働きは象に在り、爻の主な役目は辭に在るが故に、繫辭傳中の象、辭は主として卦象、爻辭であることを表はす。吳仁傑をして易圖略に於て「凡此者（象象辭）參差錯綜說之、殊不易了、思之既久、乃知其爲互言也。合六爻而爲卦、分一卦而爲爻、文王雖總一卦以繫辭、而其辭不外

乎爻、周公雖分六爻以繫辭、而其辭實本乎卦」と言はしめる所以である。

(2) 變

是故君子居則觀其象而玩其辭、動則觀其變而玩其占。(上篇第二章)

孔穎達曰、動則觀其變而玩其占者、言君子出行、與動之時、則觀其爻之變化、習玩其占之吉凶。

姚配中曰、象卦象。辭彖辭。變爻。占爻辭也。

錦城曰、變者卦之象也。占者爻之占也。

象卦象。爻爻辭。變卦之變化、否泰剝復、爻之變化、潛見飛躍。占爻之占辭吉凶悔吝。

此文は錦城も、變に對して、卦之象と言つたり、卦之變化と爻之變化とを擧げたりしてゐる。朱子も占に對しては、「占謂其所值之吉凶之決也。」と爻を指してゐるやうである。是等に就ては同じく上篇第二章で此文の前にある「是故君子所居而安者易象也。所樂而玩者爻之辭也。」と照合はして見て行きたい。居と居、動と樂とが同一のものかと考へる。即ち「所居而安之象、辭」「所樂而玩之變、占」となる。換言すれば卦象、卦辭、爻變、爻占である。從來の解釋は皆此に據つてゐる。變は爻變で差支へないが、辭が卦辭では落着きが悪い。然らば居と居、動と樂とはそれ／＼異つたものである。居と樂とが一つになつて、居にも動にも別々に屬するのであらう。さうすれば變はやはり卦變であり、辭はやはり爻辭である。即ち卦象、爻辭、卦變、爻占である。錦城が

居者(所居而安者)安處之義、與後節居動之居異矣。虞翻以樂作變、極非矣。

と述べてゐるのも此の意味であらう。

次に卦爻何れとも斷定を下し難いものゝ例を擧げて見よう。

變動以利言、吉凶以情遷。是故愛惡相攻而吉凶生、遠近相取而悔吝生、情偽相感而利害生。凡易之情近而不相得則凶、或害之、悔且吝。(下篇第十二章)

變而通之以盡利、鼓之舞之以盡神。(上篇第十二章)

錦城曰、否與泰、變也。當否則不利君子貞、儉德避難。當泰則財成輔相、以左右民。是所以通也。

下文鼓天下之動者存乎辭、爻之辭也。然則變通以卦言、鼓舞以爻辭言歟。

變通が卦であれば、利が卦であり、前章の「變動以利言」の變動亦卦である。又上篇第十二章「設卦以盡情偽」から下篇第十二章「情偽相感而利害生」へのコースをとつても、利害が卦になり、随つて變動が卦變になる。こゝまでは一致する。

道有變動、故曰爻。爻有等、故曰物。物相雜、故曰文。文不當、故吉凶生焉。(下篇第十章)

錦城曰、所謂道有變動、故曰爻者、上繫六爻之動、是也。仲晦曰、道有變動、不是指那陰陽老少之變。是說卦中變動、如乾坤六畫初潛二見三惕四躍。這箇便是有變動、所以謂之爻。於乎顛倒彼此、何不達之甚也。

此の變動は爻である。尙余談乍ら、右の朱子の言に對する批評は、十卷本に於ては更に「朱子之言亦不可廢也」と述べてゐる。

參伍以變、錯綜其數、通其變、遂成天下之文。極其數、遂定天下之象。(上篇第十章)

錦城曰、文爻之文、象卦象。

聖人能知天下之人情、又能通天下之事變。參伍考索之、模寫比擬之、以爲六爻之變、以爲六爻之辭、以爲天地之至文。

爻位爻辭共曰文。

此に對しては朱子は「此尙象之事、變則象之未定者也」と言ひ、東涯は「通參伍之變則卦爻可見。卦者文之大事。故曰成天地之文」と言つてゐるがやはり錦城の説を是とすべきであらう。「文」は前章に據つて見るにやはり「爻」との繋がり考ふべきであり、又下篇第六章に於て「其辭文」と言ふのもやはり之を裏書するものである。又虞翻、陸績本が

文の字を爻の字に作るに據つても之を證明し得る。然らば通變は爻である。極數が卦であることは言ふまでもない。而して通變、變動、變通皆同じである。錦城は

變而通、與通其變、皆言通事變。其義全同。

曰變化、曰變動、曰變通、見上下繫。陰魄變而爲鬼、陽魂變而爲神。與易之變化同。

凡繫辭中、所謂變通變皆同。

といふ風に度々此の事を述べてゐる。「變通趣時者也」の變通が爻變であることも既に述べておいた。かくて先に卦變であると言つたのと異なる。於是、變動、變通に卦變、爻變の兩者があることを知る。同様の言葉に上篇第八章「聖人有以見天下之動、而觀其會通」の會通といふ言葉がある。錦城は「會通與變通、大略相同」と言つてゐる。

極數知來之謂占。通變之謂事。(上篇第五章)

蔡節齋曰、通變通卦變也。

錦城曰、通變潛見飛躍之變、否泰剝復之變、亦同。事易道。

前述の所によつて判斷して行けば、占は爻であり、極數は卦である。兩立し得ない。錦城は通變に對しては右の如く卦變と爻變とを擧げてゐる。又下篇第十二章に於ても「變動卦爻之變也」と述べ、變動に續く愛惡、遠近、情偽に對して「皆以卦爻言」と言つてゐるが、極數に對しては一言も觸れてゐないのはどういふ譯であらうか。此の極數に對しても卦變と爻變とを認めない譯には行くまいと思ふ。

次に剛柔の變は如何。

是故剛柔相摩、八卦相盪。(上篇第一章)

剛柔相推而生變化。(上篇第二章)

錦城は「剛柔相摩、與第二章及下繫第一章所謂剛柔相推、判然別義」としてゐるが、どういふ風に違ふか明かにして

ゐない。唯剛柔相摩に對して「是言易道而比天之陰陽相摩也」と言つてゐる。然し「剛柔相推」を卦變として取扱ふのもやはり易道であることは言ふを俟たない。それ故次のやうにも述べてゐる。

剛柔相推而生變化者、首章、剛柔相摩、八卦相盪。又「卦爻陰陽迭相推盪、陰或變陽、陽或化陰（聖人所以觀象而繫辭、衆人所以因著而求卦者也）」者是也。朱子所解得矣。

「」内は朱子の言である。（「」内は引續いてある朱子の言を筆者が勝手に加へたものである。此によつて見れば、錦城も結局「剛柔相摩」と「剛柔相推」とを同じものと見たのであらう。私も同じたと思ふ。

又動を爻と見る立場から述べた錦城獨特の意見がある。此は非常に面白いと思ふ。參照に便にする爲孔穎達、朱子の注も併記したい。

天下之動貞夫一者也。（下篇第一章）

孔穎達曰、言天地日月之外、天下萬物之動、皆正乎純一也。若得乎純一、則所動遂其性、若失乎純一、則所動乖其理、是天下之動、得正在一也。

朱子曰、天下之動、其變无窮。然順理則吉、逆理則凶、則其所正而常者、亦一理而已矣。

錦城曰、按一者一爻之辭也。天下之動、千差萬別、然而占筮之道、決之一爻之辭。

朱仲晦曰一理而已矣。何其不通之甚哉。

(3) 吉 凶

八卦定吉凶。（上篇第十一章）

韓康伯曰、八卦既立、則吉凶可定。

孔穎達曰、八卦既立、爻象變而相推。有吉有凶。故八卦定吉凶也。

何れもはつきりしない。吉凶を爻に屬せしめる事を明瞭に認識してゐない爲である。今迄引用して來た文章で満足出

來なかつたものは、かういふ理由に基くものが多かつたのである。錦城は「言吉凶限爻辭、然上繫第十一章、有八卦定吉凶之語」と述べて例外として扱つてゐるのであるが、下篇第一章に於て「吉凶主爻辭而言」と緩和し、下篇第十二章、「是故愛惡相攻而吉凶生」の所に於て「吉凶卦爻之辭也」と斷定してゐる。而してその例として下篇第一章「吉凶悔吝者、生乎動者也」と「吉凶見乎外」との二つを擧げてゐる。後者が其の例に當ることは既に述べた通りであるが、前者はやはり(六)に於て述べた通り爻辭に限られるものであらう。要之、吉凶も卦爻兩方に係ると見なければなるまいと思ふ。

以上によつて、繫辭傳に使用された「象・辭」の中重要な問題はすべて網羅したと思ふ。「象・辭」なる語の中、取上げなかつたものもあるが、それ等は必要を認めないが故にその儘にしておいた。此によつて繫辭傳中の「象・辭」及びそれに關聯したものには大體一定の意味がある。併し乍ら幾らかの例外はある。といふ事を知り得たと思ふ。而して此等のものがやがて繫辭傳製作者及製作年代探求の一據點となりはしないかと思ふ。(二・一〇・七)「大尾」